

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

贖罪愛

——マルコ伝第10章35～45節——

小池辰雄

1965年2月21日

わが飲む酒杯 御靈における權威 神に仕える者 贖罪愛 我と共にパラダイスだ 十字架の
前に降参 聖靈の愛 神の栄光の体現者 終末的実存

【マルコ10・35～45】

³⁵ここにゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に來りて言う『師よ、願わくは我らが何にても求むる所を為したまえ』³⁶イエス言い給う『わが汝らに何を為さんことを望むか』³⁷彼ら言う『なんじの栄光の中に、一人をその右に、一人をその左に坐せしめ給え』³⁸イエス言い給う『なんじらは求むる所を知らず、汝等わが飲む酒杯^{さかずき}を飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか』³⁹彼らいう『得るなり』イエス言い給う『なんじら我が飲む酒杯を飲み、また我が受くるバプテスマを受くべし。然れど我が右左に坐することは、我的与べきものならず、ただ備えられたる人こそ与えらるるなれ』⁴⁰十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤り出でたれば、⁴¹イエス彼らを呼びて言いたもう『異邦人の君^{きみ}と認めらるる者の、その民を宰^{つかさ}どり、大なる者の、民の上に權を執ること、汝らの知る所なり。然れど汝らの中にては然らず、⁴²反つて大ならんと思う者は、汝らの役者^{えきしゃ}となり、⁴³頭^{かしら}たらんと思う者は、凡ての者の僕となるべし。⁴⁴人の子の来れるも、事えらるる為にあらず、反つて事うることをなし、又おおくの人の贖償^{あがない}として己が生命^{いのち}を与へん為なり』⁴⁵

●わが飲む酒杯

³⁵ここにゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に來りて言う『師よ、願わくは我らが何にても求むる所を為したまえ』³⁶イエス言い給う『わが汝らに何を為さんことを望むか』³⁷彼ら言う『なんじの栄光の中に、一人をその右に、一人をその左に坐せしめ給え』³⁸イエス言い給う『なんじらは求むる所を知らず、汝等わが飲む酒杯^{さかずき}を飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか』³⁹彼らいう『得るなり』イエス言い給う『なんじら我が飲む酒杯を飲み、また我らいう『得るなり』イエス言い給う『なんじら我が飲む酒杯を飲み、また我



が受くるバプテスマを受くべし。⁴⁰然れど我が右左に坐することは、我の与うべきものならず、ただ備えられたる人こそ与えらるるなれ』⁴¹十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤り出でたれば、⁴²イエス彼らを呼びて言いたもう……：

あいかわらず、この弟子どもは見当外れなお願いをしたり、質問をしたり、討論をしたりしている。似たようなことはこの前に出てきましたね。

「誰が天国で大きいか」

というようなことを言つて、またキリストにやられてしまった。

「おさなご幼児の如くあれ」

ということを言われたわけです。今度も、

「誰が右と左に、右大臣と左大臣になるか」

というようなわけです。どうも、男というものは、そういう権勢的なことを好むらしい。特に30歳をこえると、そういつた権勢欲というやつが出てくる。これが非常に危ないわけです。そうすると、他の十人が、

「ヤコブとヨハネはけしからん」

というようなわけで、これがまた争つて、憤つてどうのこうのと。

³⁸イエス言い給う『なんじらは求むる所を知らず、汝等さかずきわが飲む酒杯を飲み、

我が受くるバプテスマを受け得るか』

「わが飲む酒杯」とは殺害のことです。

「我が受くるバプテスマ」

とは、十字架のことです。ヤコブもヨハネも、他の外典によると、両方とも殉教の死をとげたことになっています。キリストが預言された通りになつてしまつた。ペテロもそうですが。パウロもみな、使徒たちはみなやはり最後は迫害を受けて殉教の死をとげた。だから、

³⁹彼らいう『得るなり』イエス言い給う『なんじら我が飲む酒杯を飲み、また我が受くるバプテスマを受くべし。

「受けることになるぞ」

とキリストは言われた。しかとにかく、この時は、彼らは見当違ひなことをした。なぜ、そういうた見当違ひなことを言うか、問題にするかといえば、もう申すまでもなく、聖靈が来てないからです。

●御靈における權威

聖靈ということはやつとこの頃、キリスト新聞なんかを見ても、

「キリスト教界で聖靈のことが今まで非常におろそかであつた。これから真剣に聖靈のことを研究しなくてはいかん」



と——相変わらず「研究」なんていうことを言つてはいる——聖靈の研究ということが課題になつて、かなり組織的にやるらしい。まあ、研究もいいでしよう。けれども、聖靈のことはいくら研究しても——聖靈に限りませんけれども——福音の世界はどこまでも、身につけなければ、体験しなければどうにもならない世界です。どんなに聖書研究をやり、神学研究をやつても、この使徒的な質、預言者の質には来れない。これははつきりしている。私たちがねらつてはいるところの、またそこにおいて告白しているところの事態は、正直、本当の本道を行きつつある。何のかんのと言つても、私たちは本当の道を進ましめられてあるという、皆さんは、御靈における本当の権威と自覚は十分もつていただきたいと思うわけです。それだけ、皆さん一人ひとりの使命は重大です。どんなによつてたかつて、どうのこうのと言つても、人ひとりの本当の聖靈の人にはかなわないんです。それだけ、福音の世界ははつきりしてはいます。

キリストは、彼らがこの

「受くべきバプテスマ」

を受ける角度になつてこなければ、求むべきところを求め得ないということを知つていらつしやる。彼らがペンテコステを通つて、聖靈降臨を受けてから、ガラリとこの使徒たちは変わつた。^{じかじか}直々にイエス・キリストに接し、その言葉を聞き、その目と目をもつて相交わつていた直々の世界で、イエス・キリストが分からぬ。そこに雲がかかつてゐる。けれども、イエスが天界に行かれてから、この煙幕が破られた。それは即ち、聖靈の光がそれを貫いて、彼らに——パウロもそうです、

「我が眼より鱗の如きもの落ちたり」

と言うときに——本当に聖靈の貫きが来たわけです。

いわゆるクリスチヤンは、レツ・テル・クリスチヤンというようなことであるならば、いくら一応良さそうにみえても、実はそれは本もののところにはまだ到達してはいない。しかし、どんなに学問がなからうが何であろうが、本当に御靈を受けたクリスチヤンは、どんな大学者よりもこのキリストに近い。

この問答の鍵はどこにあるか。結局、聖靈を受けていないから、福音書のいたるところにおいて、彼らは聖靈の人たちではないということが暴露されている。福音書の尊さといふものは、福音書においてキリストにぶつかることです。使徒たちのこの躊躇^{ちよ}転びにおいて、いかに聖靈なき世界はかくのこときであるかということを、福音書によつてまた知らなければならぬ。パウロの書簡になると、これはもう聖靈の世界ですから、そういうものは出てこない。使徒行伝も、聖靈の貫きをもつて、光が闇に勝つてゐる世界です。福音書においては、キリストの他はみな闇なんです。キリストだけが光であつて、闇の世界にいかにこの光が歩いているかという所ですので、福音書においては、このキリストを、また光と闇がいかに違うかということを、この一点においてははつきりと見ていかなければならぬ



いわけです。

●神に仕える者

⁴²イエス彼らを呼びて言いたもう『異邦人の君と認めらるる者の、その民を宰^{つかさ}どり、大なる者の、民の上に權を執ることと、汝らの知る所なり。⁴³然れど汝らの中には然らず、反つて大ならんと思う者は、汝らの役者^{えきしゃ}となり、⁴⁴頭^{かしら}たらんと思う者は、凡ての者の僕^{しもべ}となるべし。

「役者」 「僕」

という言葉が出でている。「ディアコノス」というのがこの「役者」という字で、「僕」の方は「ドゥーロス」という字です。「ディアコノス」や「ドゥーロス」になれという。要するに「仕える者」

ということです。「罪の奴隸」という言葉があるが、罪の奴隸ではない。神に仕える者、また本当にその意味において、人に仕える者です。

⁴⁵人の子^{きた}の来れるも、事^{つか}えらるる為にあらず、反つて事うることをなし、

これも「ディアコネオー」という字が使つてある。

又おおく人の贖^{あがない}償^{あがない}として己^{いのち}が生命^{いのち}を与へん為なり』

という言葉は「リュトロン」という、もとは
「身の代金」

のことを意味した言葉です。

「多くの人に代わつて身の代金を払う者」

というようなわけです。よく、罪の赦しのことも、

「負債^{しろきん}を払う」

というような言い方を——主の祈りの中にもあります——金銭関係の言葉を使つてゐるけれども、もちろん、内容はそういう金銭のことではない。

「己^{いのち}が生命^{いのち}」

という字は、この場合は「プシヘー」という字で、「魂」という字と同じです。この生命を与えるためであるといふ。

●贖罪愛

今日は、「贖罪愛」という題を出したわけです。しかし、福音書の中でも、贖罪というこ

とをキリストがはつきり言われているところはそう多くはない。ここでは、

「おおく人の贖^{あがない}償^{あがない}として己^{いのち}が生命^{いのち}を与へん為なり」



「人の子」

というような、三人称的な言い方で、「私は」とは仰っていない。

贖罪のことは、アブラハムの有名な「イサクの献供」から既に出発して、旧約聖書から

いろいろな事実を通して——厳密な意味における贖罪という言葉はイエス・キリストの他には使われてはならないわけですが——

「人の代わりに自分の生命を捨てる」

という角度の、そういういた贖罪的な角度の事態は、既にひながたにおいて始まっている。

旧約聖書の宗教そのものが、動物であるけれども

「当歳の小羊を屠^{ほぶ}つて罪の贖いとする」

ということは、旧約聖書の宗教の、祭司的な宗教の型ですから。その型を本当の実質にしてしまったのがイエス・キリストであつた。申すまでもなく、ヘブル書はそのために書かれてあるよう偉大な書簡です。

「ヘブル人に与えた今までの贖罪とは違う。イエス・キリストの贖罪は動物の贖罪とは違う。旧約の宗教はここですっかり完全に満たされた。完全なかたちで内実をもつて満たされた。」

ということを徹底的に語っているのがヘブル書です。皆さんは、贖罪のことなら、このヘブル書をよくごらんになつてください。またローマ書もそうですねども。

「執成しの祈り」はドイツ語で「フェュールビッテ」(Fürbitte)と書います。モーセが執成しの祈りをしています。出エジプト記32章30節から、

³⁰明日モーセ民に言ひけるは汝らは大なる罪を犯せり。今我エホバの許に上^{おおい}りゆかんとす。我なんじらの罪を贖うを得るゝともあらん。

「こゝにちゃんと「贖罪」という言葉がある。

³¹モーセすなわちエホバに帰りて言ひけるは、嗚呼この民の罪は大なる罪なり。彼等は自己^{おのれ}のために金の神を作れり。

「金の牛」を造つて、金の牛を拝んだという馬鹿らしい話です。

³²然れどかなわば彼等の罪を赦したまえ。然らずば願くは汝の書きしるしたまえる書の中より吾名を抹^{けし}さりたまえ。」(出エジプト32・30～32)

という。即ちこれがモーセの執成しの祈りです。

キリストは私たちの全てのマイナスを引き受けて、そして、私たちに逆にプラスをくださっている。絶対恩寵というこのプラスをくださる。愛にもいろいろありますけれども、贖罪的な愛は最高の愛です。また、人間の世界で最も力強いところのものはこの贖罪愛の力です。これだけが本当にこの世界の歴史を背負っている。世界の歴史を背負つているところの一番どん底の力は贖罪的な愛です。これが神の国を来たらしめるところの一番の潮流である。私たちの生活の質、心の質というものはこのキリストの贖罪愛である。



私たちは、キリストの意味において、人の罪を贖うことはできません。しかし、人のために背負っていく。ゲーテが、

「他の人たちのための恵みある業」
〔わざ〕

ということを言っているが、恵みある業の極点はこの贖罪の愛の業です。ゲーテの『ファウスト』の終りの方で、執成しをしている人たちはこの贖罪愛の角度から祈っている。これはみんな女性です。ダンテにしろ、ゲーテにしろ、そういういた贖罪愛的な女性によつて、彼らの魂は清められ高められて行つた。

大体、人の世界を見ていると、悪い事をするやつは男の方が圧倒的に多い。犯罪者は大部分、男です。女性が男性を執成して、その魂を高め清めていくという役割をもつてゐる。期せずして、ダンテもゲーテもそういう角度から、女性の魂を描いています。

しかし、人間いかなる人も人の罪を本当に贖いることはできない。このことにおいては、イエス・キリストの十字架は絶対に質のちがつた特別な贖罪の十字架であつて、天才の殉教的な死ではない。

●我と共にパラダイスだ

45 「おおくの人の贖償として己が生命を与える為なり

「おおくの人」と書いてあるけれども、これは「すべての人」です。すべての人ですけれども、しかし、なかなかこれが受け付けない。キリストの靈的な贖罪愛に逆らう。

「そんなことがあるか」

なんてなわけで。これはどうにもならん。それはもう自分で地獄へ行くよりか仕方がない。もちろん、天国に行くひとたちは、キリストの贖罪愛を自覚して受けとつた人ばかりではない。「キリスト」の「キ」の字も知らない人も天国へ行きます。キリストの贖罪愛をいくら知つても、これはどつこい天国へ行けない場合もある。どういう人が天国に行かれるとかは誰も分からん。その一人ひとりを神さまは見て、

「お前は天国行き」

「お前はちょっと待て」

「お前は直ちに地獄へ行け」

とか、いろいろあるだろうと思ひます。

とにかく、地上における実存の総決算をなしうるものは神さまだけです。それは普通の計算には合わない。キリストの十字架の横の片一方の盗賊は——悪いことをして、殺人や強盗をやつたらしい一人の盗賊がいた——ほとんどマイナス99という生涯を送つてきて、ところが最後の瞬間に、

「私は悪かつた。どうか、せめても、あなたが天国にいらつしやるときに、この悪いやつでも、名前を覚えていただきたい」



と言つた。そしたら、キリストは、

「汝、今日、我と共にバラダイスだ！」

と仰つた。マイナス99が、その碎けた魂が直ちに天界に進む。

「それでは、私は一生悪いことをしていて、最後に悔改めようか」

なんていうのはダメです、そういう計画的なのは。それは神さまはよく知つていらっしゃる。私たちの心の中は、詩篇139篇にあるとおりです。

（註…第139篇。1エホバよなんぢは我をさぐり我をしりたまへり 2なんぢはわが坐るをも立をもしり又とほくよりわが念をわきまへたまふ 3なんぢはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだしわがもうもの途をことごとく知たまへり 4そはわが舌に一言ありとも觀よエホバよなんぢことごとく知たまふ……）

●十字架の前に降参

誰も人が人を品定めすることはできません。しかし、私たちはこの福音に接して、主のこの贖罪の驚くべき十字架の愛で現に、

「我を受けとる者は死ぬとも生きる」

と、一切の罪は赦されてある。これを本当に受けて、もう神の前に、キリストの前にぶつぶれる。キリストの十字架だけが私たちを本当に碎けの魂にする。一時的には、魂は碎けたつて、そんなものは大したことはない。我々の本当の悔改めという魂の方向転換は、十字架の前に本当に降参する人か、十字架の前に降参しないか、そのどちらかです。

「分かる、分からない」

の問題ではない。十字架ということが分かつたつて、研究したつてどうにもならん。

その前に本当にぶつぶれる人は、その人には今度は聖靈がくる。キリストの生命の、義の、愛の、光の靈が私たちの中に臨んでくださる。この御靈におけるところの――何と言いましょうかね、確信というか、力というか、豊かさというか、何というか――もう、自分がはずれた或るものであります。自分があるところには、御靈は本当に内住しない。自己がはずれた、自我というやつがはずれた或るもの。

「新しき我」

と言つたつていい。けれども、私はもう「我」ということは言いたくない。とにかく、しかし、それは某漠^{ぼうばく}たる何者かではない。はつきりした、それは我ですよね。

「天上天下唯我独尊」

というけれども、あの「独尊」の「独」の字は本当に宇宙的な大我の我です。お釈迦さんの自覚も、決して自分を立てているわけではない。

「この我がうちに来たり給うところの御靈のキリストをいかんせん」という自覚です。これは自己を立てる角度とはおよそ違う。御靈を本当に受けとれば、人



のために執成さざるを得なくなつてくるわけです。パウロが、
「同胞のためには、もしキリストに捨てられててもいいよ」

と言う。それほどの驚くべき、同胞のための熱愛というものは、キリストから来ているところの聖靈の愛です。

●聖靈の愛

光は回りを照らさないではいられない。泉は溢れて流れないではいられない。聖靈の愛はそのように祈らないではいられない。働くではないではいられないところのものです。もし、それが何か沈滯したようなことであるならば、それは本当に聖靈の愛を受けていない。

聖靈の愛というものは、十字架というものは、常にこれは祈りの世界においてこそ本当に受けとられていく。キリスト者は祈りをぬかしてしまつたら、いかなる善きことも出でこない。神さまとの交わりが祈りですから。キリストとの交わりが祈りですから。キリストとの交わりの祈りの世界で、

「キリストの中に」

という、

「我キリストの中に、キリストわがうちに」

という、この切つても切れないところの世界が展開してくれば、それがキリストならばキリストは働くないではいられない。キリストの靈は他人のために祈らないではいられない。そして、必ずそれは聞かれていく。

必ずその祈りは聞かれていく。必要な人でつくわさせてください。クリスチヤンの本当の生命は、そういった生き方をしているかしていないかで決まるので、その人がいわゆる立派であるとか何とかということではない。

無教会は、自分の聖書研究、ギリシヤ語やヘブライ語、聖書の勉強、そんなことばかりで、何か象牙の塔の中の聖書いじくりになつてしまつたら、そして、とにかく何年も通つて日曜にしづしづと来てしづしづと帰つて行く、そんなことでもあるならば、それではダメですよ。どうか、皆さんは、何かしらんけれども、生命の溢れたことであつてもらいたい。クリスチヤンは、まじめな方はみな、御靈の世界に或る程度は触れています。決して私は人のことをどうのこうの言うのではありません。けれども、

「もうこれでなければ」

と言つて本当に胸襟を開いていける——本当に胸襟が開けるんですよ、この御靈の世界にくると——そういうキリスト者が、日本のいわゆる「日キ」とか何とかいうご連中の中に、もつともつと起きていかなければ。学者はたくさんいます。けれどもそれでは仕方がない。



●神の栄光の体現者

今のはモーセの場合でしたが、イザヤ書43章を見ると、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此いい給う。イスラエルよ汝をつく
れるもの今かく言い給う。おそるるなけれ我なんじを贖えり。我なんじの名
をよべり。汝はわが有なり。」（イザヤ43・1）

とある。神さまが私たちを、キリストが私たちの名を呼んでおられる。そして、「何も恐いことはない。自分の罪も何も心配するな。私はお前を完全に贖つた。汝はわがものである」

と。そして、そのように「神のもの」とされた者は、また私たちは、人をそういった同じ恵みの中に入れさせようという本当の悲願が湧いてくる。湧かざるを得ないわけです、本当に神のものとなつたならば。神のものとなつて、ノホホンなんていうことはありえない。

それがもしそうであるならば、それは間違つた神秘主義です。それは本当の贖罪も、本当の聖靈も受けていない。いわゆる神人合一ということはありますよ。宗教的な現象といふものはいろんなものがある。けれども、このキリストの贖罪愛というものを本当に受けとつて、御靈が来た世界はそれとは違う。取り澄ました世界ではない。己独り聖しとしている世界ではない。

こないだ申し上げた、和光同塵としている。本当に光を和らげ、同じ塵となつて、喜びを喜び、悲しみを悲しみとして、それを全部本当の喜びに変えてしまう。全部、悲しみを喜びに変えるという。イザヤ書61章3節にあるように、

「灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、
あぶらをあた予え、かなしみ悲哀にかえ歓喜の
らは義の樹工ホバの植えたもう者その栄光をあらわす者ときよとなえられん。」（イザヤ61・3）

「歓喜のあぶら」というのは聖靈のことです。

我々の肉体の欠陥なんていうものは五十歩百歩で、みんなどうせ、或る時がくれば自分の身体にサヨナラしなくてはならない。我々は自分の身体にサヨナラするんですが、その奥に聖靈は新しい衣を着せて、靈体をつけられて次の世界に進んでいく。御靈の信仰は観念しているのではない。そういう実質を事実もつてている。療養所の方々がこれを受けると、何かしらん力を得て起き上がつてくるというようなわけです。すること為すこと、またいかなる欠陥にしろ、神さまは必要な時に必要なようにしてくださる。即ち、

「その栄光をあらわす者ととなえられん」

と、その少し後に書いてある。栄光を現す者。神の栄光の体現者。栄光の体現者というのは何も、人に示して威張るのではない。栄光を体現して、その同じ栄光を人に分かち与えなくてはいかん。それが本当の体現の意味です。これが本当の僕です。



そういつた自由者というもの。「僕」とか「役者」というのは何かといふと、人にそういうふた恵みを与える者ということです。人に恵みを与える。

「奉仕」「人に仕える」

と言うと、何か気分が余りおもしろくないよう感ずるような言葉ですけれども、そういうやない。相手に分かち与えてやまざるところの者、相手を担つてやまざるところの者、それが本当の僕である。本当の役者である。

「我は福音の役者。我はイエス・キリストの僕」

とパウロが言つたのはそのことです。

僕ほど、役者ほど豊かな人はないんですよ。

「私は持つてゐる」

なんて言つて威張つてゐるのはひとつも豊かではない。何もない者が実は、無限なものを与えるものを持つてゐる。跛者に、

「金銀は我になし。イエス・キリストの御名によりて立て」

と言つたのがペテロである。ペテロに限らず、使徒たちは、本当のキリスト者は無一物無尽蔵にもつてゐる。「もつてゐる」ということは、ただもつてゐるのではない。無尽蔵に与えるんだ。この贖罪愛の実体はもの凄い力をもつてゐる。その力は人を倒すのではなくて、人を助け担当。もの凄い豊かな生命をもつてゐる。それは限りなく与える生命である。その力は担当の力であり、与える生命である。それが即ち、贖罪愛の人の実体である。

それはイエス・キリストを頂かなければ、出てこない。イエス・キリストを頂く、受けとることです。「信ずる」なんて、イエス・キリストは神の子である事を信じてみたり、私たちの罪を贖つてくださつたという事柄を信じてみたつて、どうにもならん。事実受けとつていなければ。だから、私はこの「信ずる」という言葉は、そういう意味ではあまり好きではない。受けとることです。受して、授受する人だ。神から受けて、人に授ける人が授受者だ。これが即ち、本当にキリストの贖罪愛を頂いたところの人である。

「信仰によつて義とされる」

「キリストの十字架の贖いを信ずることによつて義とされる」といつて、自分が義となつてそれでいい気になつてゐるような、ヘタするとそういうふた觀念クリスチヤンが多くて困る。そういうのは必ずパリサイになる。

私は無教会に育つたから、あれは嫌いなんだよな。

「信仰によつて義とされる」

なんて言つてね、ギシギシしちやうから（笑）。ダメですよ、そんのは。藤井武先生も「義」という言葉が好きだつたね。けれども、申し上げてゐるとおり、義というのは「羊の我」なんだから。「羊の我」というのは本当は、この贖罪愛のキリストの^{こひつじ}羔のことです。皆さん、この福音は何とも言えないでしょ。の方々は、さつきダンテやゲーテの話を



したけれども、実は天国では非常に大事なところに置かれますよ。そういう執成しをしている。男というのは悪いやつが多いから。そういった女性の執成しの愛というものがいかにこの世の中に、実は平和をもたらしているものであるかということです。これは男ばかりだつたら、喧嘩ばかりしてしようがない。

●終末的実存

どう考へても、イエス・キリストの十字架によつて、細々ながら世界の平和は保つています。しかし、この十字架の愛に逆らつてやつていれば、どんなことにならないとも限らない。バカなもんですよ、正直。国際会議とか何とか、連盟とか言いましても、みんな誤魔化しばっかりです。いかに人間の世界の一切の事柄が、実は魂の問題に帰するか。そして、魂の問題の最後の解決はキリストの十字架というところに焦点し、そして、十字架の背後から来るところの、この驚くべき贖罪愛的な担いの力あるところのこの愛が、執成しであり担いの愛が、これが実は世界歴史を本当に進展させていくところの、神の国を来たらしめるところの終末的な事態である。終末的実存というものは、そういった人たちによつて本当に証しきされていかなければならない。

藤井武先生の「羔の婚姻」という偉大な詩がある。そのような人たちによつて担われ待たれている。どうか、結果がどのようであつても、そのような生き方をするところに、実は一番喜びと力と希望と生命がある。キリストがここで言われた

「僕となれ、役者となれ」

と言われたことは、これが本当の特権なんです。神の国の人々の特権は、この「僕」であり「役者」である。本当の力のある者でなければ、僕となれない。本当の愛の人でなければ役者とはなれない。

そういうことですから、どうか、皆さん、この集会というのも、そのように生き生きとしてどしどし伝道の面もやつてください。ただ集会をして伝道をすることだけが伝道ではない。ポケットに紙切れ（チラシ）を入れて、

「どうですか」

と、何か困っている人、苦しんでいる人にその道をその時に示されて与えるということ。なにも、街頭でそこらを歩いている大衆に向かつてやる必要はない。そんなのはみんな、二三歩あるけば、すぐ紙くずにして捨ててしまつようやつには勿体ないからね。「豚に真珠」だから。そんなことはする必要はない。けれども、時あつてか、そういった人たちに与えられる機会がある。それだけの備えは、心は、私たちはやはり持つて、どういう形でもそういうことは自由自在に自発的にやつていただきたいと思うわけです。

